美紗の会 たより

巳年に想ふ縁の糸

西松 布咏

昨年の元旦はいつもと変わらぬおせち料理を囲めるわが身の幸せに感謝しつつ東北の大震災に想いを馳せた。今年は窓から差し込む明るい光を浴びながらの同じ光景の中で、昨年末に五浦を訪れ四月に再興された六角堂に正座し眺めた大海原の青さを思い出した。

二十二年前、日立シビックセンター主催の「花の季」地唄舞公演がきっかけで地元の方々と親しくなり、爾来第二の故郷のようにたびたび茨城を訪れた。なかでも岡倉天心が毎日瞑想したという六角堂の座敷で、今は亡き俳人を囲み句作した鮮明な記憶が刻まれていたので、震災で跡形もなく消え去ったと知った時の喪失感は殊更だった。

その六角堂が見事再興し地元の協力により、天心の人間像を描く「天心」の映画化が決定したと昨年一月二十三日の東京新聞で知った時は嬉しくて記事を切り抜き大事に取っておいた。そして十一月のある日「映画【天心】のなかで唄われる詞に曲付けをお願い出来ますか？」と見知らぬ制作担当者からの一通のメールに驚くとともに不思議な縁を思わずにいられなかった。かって新聞を読んだ時、何らかの協力をしたいと思っていたので迷わず快諾した。

天心は竹中直人・大観は中村獅童・菱田春草は平山浩行・下村観山は木下ほうか　日本画壇から離れ世間からの誹謗をものともせず日本男子の心意気を唄う

この四人にまずは調布のスタジオで必死に手拍子を交え指導をした。ある時は谷中の築地塀で泥酔した天心が失意のなかで口ずさむ自作の唄を夜空の下で口伝えし、十二月末には大津港に程近い五浦海岸に建つ大観荘でのロケに立ち会った。寒さの中、監督はじめスタッフの骨身を惜しまない熱い思い。そして日本美術院を率いる天心のもとで、新しい日本画を模索する弟子達が貧困にあえぎながら遂に「朦朧体」の作風に辿り着くカットシーンの一つ一つを時計の秒針のように細かく繰り返す様子に物作りの真摯を垣間見た。

私の役目は天心と弟子達が拳で調子をとりながら「奇骨侠骨懲戒免除何のその　堂々男子は死んでも良い」と歌うシーンの監修だった。世間の非難や罵倒に動ぜず大和画でも西洋画でもない日本の絵画を追求してゆこうとの決意を繰返すその歌声は窓越しの闇にまぎれ海の怒涛に佇む六角堂に吸い込まれ明治の男達の快挙が目の前に立ち現れてくるような恍惚を感じた。

六角堂は置き物がない空き家（数奇屋）にし、ひたすら不完全を崇拝し故意に何かを未完のままにしておいて想像力の働きで未完成を完成させる意図で建立されたと言う。深夜まで続く撮影のなか、台本のページを朦朧とめくる私に天心演じる竹中さんは「お付き合いご苦労様です」といたわってくれたが、いつしか天心の思いが私の思いと重なってゆくような気がしてきた。

思えば昨年の秋に「日本をあらわしたい」をテーマにした「縁座」で松岡正剛氏と共に講師を務めたときの対象人物の一人が岡倉天心だった。

越前藩士を父に持ち横浜で生まれ育ち七歳で英語を学び、十四歳で山水思想を身につけ、やがて東大生になるとアーネストフエノロサと出会い・・・と世界と対峙しながら「東洋の夢」を見続けやがて「日本画」を海外を越え宇宙にまで届けと拡がってゆく。天心は横山大観を初めとする優れた画家を育てたがその指導たるや半端ではない厳しさだったという。稽古とは「古（いにしえ）を稽（かんが）えることだ。と時間と空間との間に何かが見えて来るまで葛藤を促し続けやがてその方法が線ではなく気配をかたちにするという日本画の概念を変える「朦朧体」となってゆく。

私は六歳で唄い始め、様々な出会いと別れを繰返しながら唄と格闘し、今日まで暗中模索の中にいる。三味線唄を邦楽としてではなく世界に響く音楽でありたいとの想いで「美紗の会」を主宰し、弟子との稽古を繰返し、今年の春には創立三十五周年を迎えようとしている。三十四年の長きに亘り二代目会長

をはじめ会の重鎮として色々お世話くださった佐久間俊治氏が「このたび誠に残念ですが正座が難しくなった」との理由で昨年末に退会されたが、こうした先達の方々のお蔭により十年ぶりに八名の新名取が誕生した。

飛田 千枝子こと　己紗 壽咏
近藤 洋子こと　己紗 洋咏
山中 幸子こと　己紗 幸咏
伊勢 克也こと　己紗 克咏
稲生 由紀子こと　己紗 悠咏
山本 健こと　己紗 建咏
池水 美都こと　己紗 美咏
縄岡 好人こと　己紗 草咏

いつも自分にも弟子にも言い続けてきたことがある。時間をかけて稽古を続けてゆけばやがて古からの言霊が望憶の声となって聞こえなかったものが聞こえて自分の唄になってくると。だから名前を伝授することを決意した時、己の唄を誕生させるべく心身を磨いて唄い続けて欲しいとの思いから名取苗字は美紗ではなく己紗にした。

今年は巳年。巳の語源は己。胎児を表し、植物が実を結び種子が出来始め、新しい誕生を意味すると言う。くしくもこの年に美紗の会の誕生を祝える幸せをつくづく思う。日々の繰返しの中で紡いできた「縁かいな」の糸は二十二年前の六角堂から岡倉天心の想いへと繋がっていった。

ひたすら「不完全」を問い続け大海原にたゆたった明治の男達の気概を胸に新しい年を舟出したいと思う。

名取りの意味

己紗 壽咏

何となくことしはよいことあるがごとし
元日は朝晴れてかぜなし　　啄木

皆々様には清々しい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は暗い報道が多かった中敬愛するところの美紗の会の明るいニュースをご披露させていただきます。美紗の会は年々目ざましい発展をしてまいりまして十年振りに新名取りが八名誕生致しました。

秋晴れの好天気に恵まれた平成二十四年十一月十一日（日）神田明神昇殿にて厳かにして格調高い名取り式が執り行われ引き続き名取り試験会場に移動、家元西松布咏師はじめ美紗の会会長朋咏、前会長忠咏、顧問加藤様の立ち合いのもと、課題曲の小唄白扇、蓼三番叟を演奏、全員無事合格、家元より各々に免状、表札など授与され全員極度の緊張から解放され、一同笑顔に変わった一瞬。

あの感動感激は生涯忘れられない至福のひとときで、ありがたき幸せです。（そう感じたのは私だけではないでしょう）

そこで改めて名取りの意味を考えるきっかけにもなりました

私は六十の手習いで入門いたしましたので、長年稽古を続けてきたことに対し、更に本腰を入れ精進するようにとご褒美を下さったのではと認識いたしますが、とかく苗字許しをいただくと有頂天になり「うまく」なったような錯覚をしがちになりますが、初心に返り、驕ることなく謙虚にして、師の意図とするところを学べたら一番の理想です。

おしまいに家元西松布咏先生の根気よい稽古ご教授に心から感謝いたし、誌上にて厚く御礼申し上げます。

灯す油

己紗 佳咏

美紗の会の入門は一九九四年十一月。ネイティブアメリカンやチベットの僧侶たちと盛んに交流をしていたためか、全ての事象がつながり、虹の夢ばかり見ていた頃だった。父の死からちょうど半年後、ご縁あり、布咏師匠の元に入門させていただく幸せとなった。

日比野充希子さんとそろっての入門、お稽古も一緒で、発表会でも二人並んで一番と二番を唄い分けるな

ど双子のように過ごさせていただいた。先輩方から「美女美女コンビ」と呼んでいただき照れくさかった日々が懐かしい。

入門から二ヶ月後に、不思議なことが起こった。「有明の灯す油は菜種なり」と初めてお稽古で唄った日、「あぶー」と高い声を上げた瞬間、父が私の中にいることをはっきり知ったのだ。「あっ、お父さん!」それは今も鮮やかな、とても不思議な出来事だった。父は私が六歳のとき、三十九歳の若さで脳溢血で倒れ、以後三十年左半身不随の身。喉が半分麻痺しているから、まともに声が出ない。その以前は素人ながら唄の名人であったことはいろいろな方から聞いていたが、録音もなく、喉に障害のない父の唄を実際に聞いたことはなかった。三味線が聴こえてくると、出かけてしまう。酒も好きだが、唄うことがなにしろ大好きで、新婚時代の母にとって三味線は敵のような存在だったそうだ。父は茨城県の大洗という漁師町の出身で、「磯節」という哀調の素敵な民謡がある。普段は都々逸やら小唄やらを唄っていたそうだが、父の唄う磯節をわざわざ遠くから聴きに来た方もいたらしい。

唄いたいと悔しそうに無理に声をあげることがあった。その仕草から、父の唄は、ちょっと苦しそうに出す、頭のてっぺんから昇りたつような高音に味わいがあったのではないかと想像できた。それは私の中で、忠咏さんの唄に近い、あの魅力だと勝手に思い込んできた。四年半ぶりに復帰させていただいた会で、忠咏さんの伴奏をさせていただくことは、私の中でそのようなサイドストーリーがあった。下手ながらも一生懸命弾かせていただこうと意気込んだ。

合わせ稽古の日、師匠と一献をもうけてくださった忠咏さん、小高先輩のお心遣いがとてもうれしかったです。ありがとうございました。四年半という敷居の高さを越えられずにいた私の背中を押してくださった近藤さんはじめ、あたたかく以前と変わらず接してくださった皆様に感謝を申し上げます。そしてなにより、破門の身となっても不思議ではない私を迎えてくださった布咏師匠の寛容に心から御礼を申し上げます。

これからの人生の日々に艶やかな灯りをともすことができるよう、芸に精進してまいりたいと思います。

拝啓　布咏師匠

勝呂 弥生

昨年六月六日にお仲間に加えていただいてから早半年余りの月日が流れました。正座もできず三味線を近くで見たこともない私でしたが、教えて頂いた唄が鼻歌で出るくらいになりました。毎回お稽古が楽しみで楽しみで。これも師匠の熱意と忍耐の賜物と深く感謝しております。

思えば一昨年、大学の先輩が出演なさる美紗の会に伺ったのがそもそもの始まりでした。硬式テニス部の先輩でもあったI姉はその脚のひらめ筋のたくましさに象徴されるような男前でした。その姉が心中ものの女の悲哀を声震わせ唄っておられるではありませんか。

そのギャップに感激し、私も是非と決断した次第であります。

初めてお稽古に伺ったとき、「間」という概念にこれぞ和の心と痛く感じ入りました。日頃内科医という職業柄から素早い判断を要求されますが、この「間」こそオフの私に欠けているものではないだろうかと。例えば、師匠のお電話での話し方には、留意し聞かせて頂いていると、「もしもし」ひとつにもそれがありました!

そして、唄に込められた背景を想像することも楽しみです。

『お伊勢参り』で長右衛門さんの岩田帯という下りがあります。私は福助の足袋のようにメーカー名だと思っていたのですが、この短い歌詞に凝縮された出来事を知り実に興味深かったです。また、『忍ぶ恋路』のお稽古では、師匠から初々しくないとのご指摘をいただき、師匠の仰る女人像と私のは随分違うと驚きました。師匠は当然うら若き女、ところが私はどうしても熟女の恋が頭に浮かんできてしまうのです。

ともあれ唄の中で役者になれるようで新鮮な感覚です。

これからはI姉の心中ものを目標に、師匠の艶と深みのある唄と凛とした三味線の音色を心に刻みながら「間」を追求しお稽古に精進してまいりたいと思います。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

愛しの啄木のゆかりの地に

渡辺 陽子

編集社上司の福岡さんの紹介により美紗の会に入門し、まだ四か月足らずの状態で「美紗の会のつどい」の舞台に上がらせて頂きました。

そもそも、三味線など和の芸事に興味を持ったのは、石川啄木からでした。啄木の短歌は以前から好きで、今年、通信の大学の卒論で啄木を取り上げました。特に私が着眼したのは、啄木と恋人関係にあったと言われる釧路の芸妓の小奴です。卒論はなんとか無事に書き上げることができましたが、どうしても、啄木と芸妓小奴との真の関係性は判らないところがありました。詩人と芸妓の付き合いとは、お座敷で三味線を楽しみながらの交際とはどういうものなのか、日本の伝統的な和の雰囲気をよく知らないために、当時の風俗に理解が及ばないもどかしさに気が付いたのです。

もっと、日本ながらの和の雰囲気に触れたい。そんな気持ちで美紗の会に入門させていただきました。

しかし、慣れない邦楽は得意な(?)カラオケで最近の曲を歌うようにはいかず、やるせなさを感じつつも演奏の当日を迎えたのです。

おどろいたのは会場の太栄館が、私の大好きな啄木のゆかりの土地だったということ。かつてこの場所には蓋平館という建物があり、啄木は明治四十一年の九月から翌年の六月まで、その三階に同郷の言語学者の金田一京助と共に住み、自らの創作活動を深めていった、その跡地だったのです。啄木がきっかけで、和の芸事に興味をもった私の初舞台が啄木ゆかりの土地なんて！！ 今日の私は啄木が見守ってくれるに違いない！私はひっそりとそんなことを感じていました。

さて、すっかり浮かれ気分になった私は、ありがたくお着物を着させていただくと、自分のことはさておき、会の皆さまの風情の艶やかさに魅了されました。控室で着物姿の華やかな女性がそれぞれ三味線を爪弾き練習している様子は、現代ではないような、江戸時代や明治にタイムトリップしたような感覚で、思わずうっとりしました。

ついに出番です。私は新人故に一番最初の出番。正直、あまりそのときのことを覚えていません。練習通りに唄わなくてはと思ったのですが、緊張で声がうわずってしまったような気がします。『はじめより』と『往きによろうか』で、短い小唄のはずなのにとても長く感じました。終わった瞬間にほっとしたのと同時に、もっとしっかり唄いたい気持ちが出てきました。二度目の出番で唄った、『芝でうまれて』と『お伊勢参り』は一度目より落ち着いて唄えたような気がします。

自分の出番が終わったあとは、気が楽になって楽しいことばかりでした。上手なベテランの方の唄と三味線や、今度名取になられるみなさまの芸に耳をかたむけ、太栄館に漂う凛とした空気と共に、和の雰囲気を堪能致しました。

お着物を着て、邦楽を唄う。それはとても新鮮な喜びで、まさしくヤミツキに……なってしまいました。

まだまだ始めたばかりですが、今後も精進して日本の美をつかみたいと思います。今はまだ小唄のお稽古だけですが、そのうち三味線も教えていただきたいなと思いました。三味線を弾ける女性ってとってもかっこいいですもの！

《今後の予定》

●二月三日【日】十五時開演
岐阜・今町 かわらや大広間
第十一回粋艶会のつどい
粋艶会一門唄い初めと新年会

●四月七日【日】十二時開演
グランドアーク半蔵門・曙の間
第四十五回 美紗の会のつどい
三十五周年記念演奏会と祝宴

●六月一日【土】十四時開演
港区高輪区民ホール
第一回 月虹楽衣舞
【忍ばずの女】
唄・三味線 西松 布咏
舞踊 花柳 千壽文
舞踏 大野 慶人
ピアノ 辻 隼人
映像・演出 飯名 尚人

●七月十四日【日】十三時開演
軽井沢・鶴間邸
第五回 蓟の会
琵琶と江戸唄と語り
ラフカディオハーン【雪女】他
琵琶・語り 遠山 顕
江戸唄 西松 布咏

■たより 第74号
発 行 者 美紗の会
編集責任者 大久保 朋子
デザイン 近藤 幹則
■美紗の会
主 宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三-二-二
白金台プレイス三階
電 話 (三四四一)一七二六
(五四四七)一四一一
E_mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www17.ocn.ne.jp/~misa5